

昭和58年度重要貝類毒化対策事業

(1) 毒化モニタリング調査

(要約)

尾坂 康・高林 信雄・今井 美代子・高橋 克成・浜田 勝雄・吹越 弘光
(以上青森県水産増殖センター)・秋山 由美子・古川 章子・宮田 淳子・
小林 英一(以上青森県衛生研究所)・川村 俊一・桐原 慎二(漁政課)・
塩垣 優(青森地方水産業改良普及所)・長津 秀二(むつ地方水産業改良
普及所)・十三 邦昭(鯨ヶ沢地方水産業改良普及所)・佐々木 勝雄・
島脇 芳雄(青森県水産修練所)

はじめに

この調査は、重要貝類毒化対策事業の一環として、青森県外海沿岸の毒化状況、毒化原因プランクトンの出現状況および環境等のモニタリングを行い、毒化予知手法の開発に必要な資料を得ることを目的として実施した。

調査方法

1 調査海域および調査地点

青森県外海では、岩崎、鯨ヶ沢、下前、今別、野牛、八戸の6地点、陸奥湾では、茂浦、久栗坂の2地点。

2 調査期間

昭和58年2月から昭和59年3月までの各月1～5回。

3 調査対象貝類

地まきおよび垂下ホタテガイ

結果

○ 青森県の外海で最初に毒化したのは、4月18日の日本海沿岸車力産の地播き貝で0.5MU(中腸腺1g当たり。以下同じ)の値であった。次いで、津軽海峡の石持の地播き貝で0.3MUの値が検出された。

なお、5月6日に日本海の鯨ヶ沢で0.3MU、下前で0.3MU、津軽海峡の今別で0.3MU、5月19日の野牛で1.0MU、6月3日の太平洋の八戸で0.7MU、岩崎で0.7MUと推移した。

○ 外海での毒化の最高は、6月2日の野牛の垂下ホタテガイで1.25MUの値で、これに次ぐのは5月19日の今別の1.0MU、5月19日の野牛の1.0MUであった。

○ 陸奥湾の毒化状況は3月22日に0.4MU(0.052MU・可食部1g当り)の規制値を越え、26日

詳細については、昭和58年度水産庁委託水産業振興事業委託費、重要貝類毒化対策事業報告書(毒化モニタリング)昭和59年3月、青森県を参照。

付けで出荷自主規制となった。最高値は青森定点の20m垂下貝で4.2MUであった。出荷の規制解除は10月8日付けであった。

- 青森県の外海で *D. fortii* が最初に出現したのは、下前で4月11日、岩崎で4月26日、鯨ヶ沢で4月28日、今別で4月26日、野牛で5月9日、八戸で4月25日となっていた。
- 各海域の *D. fortii* の最高出現数は、岩崎-4月26日の30細胞/ℓ、鯨ヶ沢-5月4日の40細胞/ℓ、下前-5月23日の15細胞/ℓ、今別-5月30日の40細胞/ℓ、陸奥湾-6月20日の1,815細胞/ℓ、野牛-5月9日の5細胞/ℓ、八戸-6月6日の120細胞/ℓであった。
- 各海域の *D. fortii* の出現期間をみると、岩崎-4月26日～5月4日の9日間、鯨ヶ沢-4月28日～6月8日の42日間、下前-4月11日～5月23日の42日間、今別-4月26日～6月13日の49日間、野牛-5月9日の1日間、八戸-4月25日～7月25日の92日間であった。
- 陸奥湾内の *D. fortii* の出現状況は、4月に入って水温の上昇とともに増加し、6月には青森定点で最高の1,815細胞/ℓの出現があった。9月に入ると水温が表層から底層まで20℃以上となり減少していった。
- 茂浦沿岸で4月12日から休日を除く毎日、水温と *D. fortii* の測定を行った結果、水温8～17℃の範囲内で出現し、特に11.5～15.0℃で多く出現した。最高出現数は、6月10日の700細胞/ℓで水温14.0℃であった。
- シリンダーを利用してプランクトンのトラップ調査と通常の採水調査を行った結果、*D. fortii* はトラップに沈澱した出現数と通常観測で得られた出現数とほぼ同程度の値であった。また、*D. fortii* のシストは認められなかった。
- まひ性貝毒の原因プランクトンである *Protogonyaulax* 属の遊泳細胞およびシストについては通常観測やプランクトンのトラップ調査結果から、陸奥湾内では出現は認められなかった。